

実践研究

特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援（２） － 修学旅行中に起こった予期せぬトラブルとその対応 －

松 本 和 久 安 田 和 夫 櫻 井 康 博 山 内 達 仁
岐阜聖徳学園大学教育学部 埼玉大学教育学部 合同会社太陽ホスピタリティー

Essential considerations on the support necessary for special education school excursions (2)

Unexpected troubles that occurred during a school trip and their resolution

Kazuhisa MATSUMOTO, Kazuo YASUDA, Yasuhiro SAKURAI, Tatsuhito YAMAUCHI

キーワード：特別支援学校 修学旅行 トラブル 対応

I. はじめに

2017年２月、岐阜県の特別支援学校21校で修学旅行を担当する小学部・中学部・高等部の教師に対し質問紙調査を実施し、前報（松本・安田・櫻井・山内，2018）¹⁾ でその概要を報告した。修学旅行の実施に当たって、特別支援学校は事前に旅行会社を通したり直接連絡したりして、必要な配慮や支援を依頼している。あるいは、学校側で自主的に配慮した内容もあった。

例えば、移動に関しては、車いす席や多目的室のある車両、すなわち東海道新幹線であれば11号車を多くの学校が利用していた。宿泊に関しては、近年「バリアフリールーム」を設置している旅館やホテルも増えており、そうした車いす対応客室の利用が最も多く挙げられた。食事に関しては、アレルギーへの対応は一般の小・中・高等学校の修学旅行でも行われるが、特別支援学校の修学旅行にはペースト食や刻み食といった二次調理への対応も不可欠である。この点について、旅行会社に依頼した学校もあったが、その詳細がレストランに正しく伝わらないこともあるようで、学校から直接依頼したケースも多かった。

このように事前に十分な準備をしても、特別支援学校の修学旅行では様々なトラブルがあったようである。本研究では、特別支援学校の修学旅行中に実際に起こったトラブルの内容と、そのトラブルにどのように対応したか報告する。

II. 方法

岐阜県の特別支援学校21校を対象として質問紙調査を実施した。2017年２月、筆者（安田）が岐阜県特別支援学校校長会に出向き、校長先生方に直接本調査の趣旨を説明し、協力を依頼した。児童生徒個人が特定される性質のものでないことの理解と調査協力の了解を得て、調査用紙を配布し郵送にて回収した。

調査内容は日本修学旅行協会（2016）²⁾ を参考にし、2016年度に実施した修学旅行の概要、活動内容、配慮事項について尋ねた。修学旅行の概要は教頭又は部主事に、活動内容と配慮事項については修学旅行主担当の教師に回答を依頼した。修学旅行中に実際に起こったトラブルとその対応については、(1) 移動、(2) 宿泊、(3) 食事、(4) 買い物、(5) 見学・体験、(6) その他の観点から自由記述で回答を求めた。

III. 結果

修学旅行中に実際に起こったトラブルについて、各項目で挙げられた件数（複数回答）は表１の通りであった。以下、項目別にトラブルの内容とその対応の具体例を挙げる。

表1 修学旅行中に起こったトラブル

(件)

	移動	宿泊	食事	買い物	見学・体験	その他
小学部	4	3	4	0	2	1
中学部	6	1	4	1	4	2
高等部	12	6	2	1	5	3

1. 移動

①徒歩・車いす移動

- ・車いす移動中に階段があった。
- 近くの駅員の方に、スロープやエレベータのあるルートに誘導していただいた。
- ・車いすを押しての移動条件について、距離については打ち合わせ済みであったが、坂や路面、混雑などについて細かい情報が不足し、移動が大変であった。
- ・バスを降りてから目的地までの移動距離が長かった。
- 雨ではなくてよかったので、とりあえずゆっくり移動した。

②バス・タクシー

- ・福祉タクシーに車いすを固定する位置が決まらず、出発が遅れた。
- 予定より入口に近い場所に停車してもらうことで対応した。
- ・帰路、高速道路の渋滞の影響を受けそうになった。
- 情報を得て協議し、途中から一般道を利用した。保護者にも、多少帰りが遅くなることを連絡した。
- ・バス車内で急に排便をもよおした児童がいた。
- 座席を変更し、最寄りのサービスエリアに寄った。
- ・福祉タクシーの車いす用のリフトが故障した。
- タクシー会社に別の車を用意してもらった。
- ・バス、飛行機等の移動の際に、姿勢の保持が難しい生徒にとって通常の座席の利用は大変困難であった。
- クッション等を利用したがそれだけでは難しく、教員の腕枕等で乗り切った。
- ・予定していたバスに車いすが乗らず、困った。サイズ、形状について打ち合わせが不十分であった。
- 別のバスに追加で車いす一台を乗せることができたため、対処できた。

③シャトルバス

- ・ホテル出発時、ちょうどよい時間のシャトルバスが車いす対応ではなかった。
- ホテルの方に依頼し、他の行き先だった車いす対応のシャトルバスに乗せていただき、ルートを少し変更して対応していただいた。
- ・宿泊先のホテルとテーマパークの直通バスが出ていると事前に伺っていたが、バスが出ていないことを当日知らされた。
- モノレールとバスを乗り継いでホテルへ戻った。

④鉄道

- ・行きのJRの電車（在来線）は通勤・通学の時間と重なり、満員ですぐに座ることができなかった。
- 臨機応変に空いている席に座った。
- ・駅で多目的トイレはあったが、車いす児童の身長に対応できるベッドがなく、探し回った。
- 特別に改札口から一度出してもらい、多目的トイレを探した。
- ・新幹線のホームで生徒がパニックを起こし、乗車できなくなりそうになった。
- 駅員さんに依頼して安全確保をし、教師が乗車の介助を行った。
- ・新幹線の多目的室利用について事前にお問い合わせしたが、連絡されていなかった。
- 車掌さんをお願いし、利用させていただいた。

- ・遅刻した生徒がいて、団体割引の適用ができなかった。
- 職員が一人残り、遅刻した生徒と一本遅い電車で空港へ向かった。飛行機には間に合った。生徒、職員とも電車代は実費負担をした。

⑤飛行機

- ・聴覚障害があり搭乗予定便の遅延の放送に気付かず、その為、電光掲示板に注目して確認することもできなかった。
- 少人数のため、近くにいる教員が情報保障した。放送は聞こえないので、「遅延便あり、電光掲示板に注意！」といったプラカードを示してもらえると、それに気付いて電光掲示板を見るかもしれない。
- ・飛行機への恐怖感でシートベルトができず、シートに座らせることが大変であった。航空会社より注意を受けた。
- 教師に対して強い抵抗を示したが、数人の教師で椅子に座らせ、何とかシートベルトをすることができた。
- ・航空機に搭乗中にてんかん発作があり、おさまった後で様子を見た。
- 担任が対応し、その後車いすを準備してもらい、移動した。見学先の医務室で休憩させてもらった。
- ・救急セットにはさみが入っており、飛行機の手荷物検査で引っかかった。
- 事前にはさみを出しておく、スムーズに通ることができる。

2. 宿泊

- ・初めて親元を離れて修学旅行を体験する中で、宿舎に着いてから、普段帰宅する時刻で外が暗くなっていくと寂しさから元気や食欲がなくなってしまった児童がいた。
- 信頼関係のできている教師が寄り添い、食事や入浴等を楽しめるように働きかけ、翌日からも活動を続けることができた。
- ・車いすの児童を乗せたり下したりする際に、部屋の玄関（ホテル）が少々狭く、苦労した。
- 教師2人で常に協力して車いすへの乗せ下しを行った。
- ・旅行会社から旅館に伝えられた各部屋の人数が違って、布団が足りなかった。
- 枕やシーツを追加で借りた。（料金はかからなかった。）
- ・夜尿症に対し対策はしたが、寝具を汚してしまった。
- 直接フロントへ尋ね、対応してもらった。添乗員さんにも対応してもらった。
- ・入浴中にてんかん発作があった。
- 付き添っていた職員が対応した。
- ・大浴場まで行くのに階段が多すぎて、車いすの生徒の移動が困難であった。
- 教師が抱きかかえて移動した。

3. 食事

- ・ミールクーポン（昼食券）が使用できる場所が変わっていた。
- 担任やグループの教師の判断で昼食場所を変えるなどして対応した。
- ・騒音が気になり、食事場所に入れない児童がいた。
- 職員が側につき、ロビーで休んだ。
- ・昼食のメニューが、自分たちの思っていたものと違って、児童が楽しみにしていたものがなかった。
- 急遽注文した。
- ・食事代が旅行会社から支払われることになっていたが、レストラン側に伝わっていなかった。
- 教師が立て替えた。
- ・体調を崩して、食事場所へ行けない生徒がいた。
- ホテルの部屋まで食事を持ってきてもらった。
- ・ホテルの食事など同一メニューは、偏食傾向の強い生徒がほとんど食べられない場面があった。
- 担任の分から食べられる食品を分け与えた。

- ・刻み食の生徒用に、事前にホテルに1 cm程度の刻みをお願いしたが、ペースト状のもので出してくださり、思いと違うものであったため困った。
- 次の食事からは持参したキッチンばさみで教員が刻んだ。

4. 買い物

- ・ディズニーランドでの土産購入時に店内が混雑しており、車いす生徒を連れての買い物が困難であった。
- 車いす生徒は店外で待機させ、担任が代わりに買い物を済ませた。
- ・生徒同士での割り勘で差ができてしまった。
- 事前指導はしたが、その場で見届けないと難しい。

5. 見学・体験

- ・USJのアトラクションに乗車する際、1人の児童が乗車に戸惑い時間がかかって、他のお客さんをかなり待たせた。
- 乗るのをやめることにも抵抗したため困ったが、USJのクルーの方がお客さんにいろいろなお話をし、場をもたせてくださり、その間に乗ることができた。
- ・船に乗るのを怖がる児童がいた。(船に乗ることは初めてだった。)
- 落ち着くのを待ってから、男性職員と一緒に乗船した。
- ・予想以上に気温が高かった。
- 保護者に薄手の服を用意してもらったり、冷却ジェルシート等を準備したりすればよかった。
- ・見学先に到着したものの、バスから降りず見学を拒んだ。
- 引率者1名又は2名が対象生徒に付き添い、バス内で待機した。
- ・ディズニーランド見学日の天候が想定以上に暑く、ストレス強く感じる生徒が出た。
- その生徒は別行動とし、建物内でクールダウンの時間を取った。
- ・ラフティングの体験中、地震があったが全く分からなかった。(体験中であったため、携帯電話などは持っていなかった。)
- 学校からのメールで気付き、全員無事であり影響がなかった旨の連絡をした。
- ・マリン体験に参加できない(船に乗れない、ジェットスキーなど)生徒がいて、担当グループの職員がその生徒にマンツーマンでついた。そのグループの支援が手薄になった。
- グループ内で役割や生徒対応などを急遽変更し、体験の現地指導員の方にフォローして対処してもらった。
- ・ボートで船酔いして動けなくなった。
- 座敷のある飲食店で休ませてもらった。
- ・入場券を自分で購入しないと納得のいかない生徒がいた。
- 自費で入場券を購入した。(ただし、事前に払っている分は返金されなかった。)
- ・大雨警報が発令され、イルカウォッチングができなかった。代替案だけでは時間をもてあますことになった。
- 添乗員さんが一瞬の天候の回復時に臨機応変に対応してくださり、別の個所も見学した。

6. その他

- ・朝、児童が遅刻した。
- 電話等で学校到着時刻を確認した。
- ・出発の日の朝、バスが出発場所を間違えて違う場所で待機していた。
- 保護者にお話し、高速道路のインターチェンジまで送ってもらい、バスもそこまで来てもらい、何とか空港まで間に合った。
- ・カップめんの容器を食べてしまった生徒がいた。
- 病院に行き、医師に指示を受けた。養護教諭と部主事とで対応した。
- ・急な発熱があった。
- 保護者と連絡を取り、生徒が持参してきた薬を服用させた。

- ・てんかん発作を起こした。
→ タクシーで事前をお願いしてあった病院へ行き、受診した。
- ・体調を崩し、病院に行った生徒がいた。
→ 前もってそのような場合については保護者と相談してあったことから、その時のタクシー代も後で請求できた。車いすが乗せられるジャンボタクシーを使用することができた。

IV. 考察

特別支援学校の修学旅行中に起きた様々なトラブルの際に、引率教師が臨機応変に対応して乗り切っている。確かに、どれだけ用意周到に準備をしてもトラブルは起きるかもしれない。しかし障害のある児童生徒にとって、同年代の友達と行く旅というのは人生のうちにそう回数があることではない（橋本，2009）³⁾。児童生徒にとって一生の思い出となる修学旅行である。避けられるものなら、できる限りトラブルを避けたい。特別支援学校の修学旅行で起きがちなトラブルやその対応について、予め旅行会社をはじめ交通機関、宿泊先、レストランなどの関係者に知ってもらえれば、修学旅行中の予期せぬトラブルは少なくなり、児童生徒にとってより安全・安心で楽しく充実した修学旅行になると思われる。また教師にとっても、修学旅行の企画・立案、そして当日の引率における負担が軽減されるであろう。

そこで、特別支援学校の修学旅行において予想される困難さと、その対応例を場面別に整理した『特別支援学校の修学旅行を計画する際のポイント（試案）』（表2）を作成した。今後は、特別支援学校教師への聞き取り調査を通して、この試案の内容について検証していきたい。

付記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C）「特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援に関する研究」（16K02088）の一部である。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、調査にご協力くださった特別支援学校の先生方に深く感謝いたします。

注・文献

- 1) 松本和久・安田和夫・櫻井康博・山内達仁（2018）：特別支援学校の修学旅行に必要な配慮や支援（1）－岐阜県の特別支援学校を対象とした調査から－，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，17，151-158.
- 2) 日本修学旅行協会（2016）：「データブック教育旅行年報 2016」.
- 3) 橋本正美（2009）旅の達人に聞く②分かってこそ旅は楽しい！，実践障害児教育，436，13.

表2 特別支援学校の修学旅行を計画する際のポイント（試案）

場面	特別支援学校ならではの困難さ	対応例
移動	長距離や雨天時、段差など、移動が困難である。 特に、車いすを利用する場合。	移動距離をできるだけ短くする。また、そのための動線（エレベーターやトイレを含む）を確認しておく。
	車いすを利用する。	リフト付きバスや福祉タクシーを利用する。 テーマパークのシャトルバスなど、全便がリフト付きではない場合がある。リフト付きバスの運行状況を確認しておく。
	車いすでの乗降に、十分なスペースが必要である。	車いすでの乗降場所を確認し、方法を手配しておく。
	長時間待てなかったり、じっとしていられなかったりする。	バスを利用する場合はこまめに休憩をとり、休憩時間も長めに設定する。 駅や空港で、待機場所を確保しておく。
	トイレを我慢できない。	新幹線の多目的室を利用できるよう、手続きをしておく。 航空機を利用する際、最後に乗り、最初に降りられるように手配しておく。
宿泊	車いすを利用する。	車いす対応客室を利用する。
	転落防止や車いす移動のためのスペースが必要である。	ベッドの位置を変える。
	入浴介助のために、十分なスペースと時間が必要である。	トイレと浴室が分かれている客室を利用する。 浴室の貸切利用を依頼しておく。
	興味のあるものに触れてしまい、誤って破損したりけがをしたりする。	部屋の花、額、陶器の湯飲みなどを撤去しておく。
	夜尿対策が必要である。	ベッドや布団に防水シートを用意する。
食事	車いすを利用する。	椅子席を利用し、テーブルの高さを確認しておく。
	にぎやかな場所を苦手とする。	個室を利用する。
	自分たちのペースでのゆったりと食事が望まれる。	メニューを選択できるようにする。 メニューの写真を入手し、事前に見せる。
	食事に対してこだわりがある。見通しがもてると安心できる。	二次調理の内容を確認し、手配しておく。（一人一人の状況に対応した、刻み方、ミキサーのかけ方など）
	二次調理を必要とする。	二次調理に必要な道具や食器の洗浄を、依頼しておく。
	持参した道具で二次調理の対応する場合がある。	
買い物	混雑した場所を苦手とする。	広いスペースのお店を利用する。
	商品の選択に時間がかかる。	事前に買い物の計画を立てられるように、商品の写真や価格のリストを入手しておく。
	できるだけ児童生徒自身で力支えたいが、代金の支払いに時間がかかる。	児童生徒のペースに合わせたやりとりや、専用レジの設定を依頼しておく。
	時間が足りなかったり見つけられなかったりして、希望する商品を買損ねてしまう。	買い直せるように、買い物ができる場所を複数確保しておく。
見学・体験	視覚障害がある。	できるだけ、触ることができるような活動を設定する。 触察地図や点字ガイドブックがあれば、手配しておく。
	聴覚障害がある。	手話通訳を手配しておく。 音声だけでなく映像による紹介を依頼しておく。
	テーマパークで、長時間アトラクションを待つことができない。	ゲストアシスタントカード、ゲストサポートパスなどの発行を手配しておく。
	急な体調不良に備える。	救護室や休憩場所を確保しておく。